

何トナレハ論點定マリシ後審問ノ際之ヲ證明スルコトハ必  
 要ナリト雖モ訴答ノ間ニ於テ之ヲ掲クヘカラス抑訴答書類  
 ナ認ムルノ目的ハ其論點トナルヘキ事實ノ性質及其何物タ  
 ルヲ簡明ニ記シ判事ヲシテ之ヲ知ラシムルニアリテ未タ其  
 爭點トナル事柄ハ果シテ眞ナリヤ否ヲ證明スヘキノ時ニア  
 ラサルナリ是レ第二原則ノ其證據ノ如何ヲ記スルヲ禁スル  
 所以ナリ例ヘハ被告カ原告ノ財産ヲ差押ヘタリトノ訴訟ヲ  
 ナスニ當リ丙ハ被告カ之ヲ差押ヘシチ目撃セリ等ノ證據ヲ  
 記スルヲ要セス只原告ハ其財産ヲ差押ヘラレシ事ヲ記スル  
 ナリテ足レリトス要スルニ本則ノ命スル所ハ被告カ財産ヲ  
 差押ヘタリトノ事ノミチ簡明ニ記スヘシト云フコアレハ十  
 リ然シテ若シ答書ニ於テ被告ハ其差押ヘノ者ヲ拒絕セシト

第三

キハ原告ハ對審ノ際證人ヲ以テ之ヲ證明スヘキモノトス  
 記入スヘキ事柄ハ爭點ニ適切ナル于係ヲ有スルモノニ限ル  
 ハシ而シテ之ヲ記スルニ最モ明確ナルヲ要ス  
 之ヲ説明セハ其依テ以テ爭ハントスル所ノ事實ニ關シ一般  
 法律ノ結果ヲ舉示セハ可ナリ其結果ヲ生セシ所ノ事柄或ハ  
 之ヲ確ムルノ證據ニ至リテハ之ヲ記入スルヲ要セサルモノ  
 トス例ヘハ乙ハ甲ノ地面ニ侵入セリトノ訴訟ナル時ハ乙ハ  
 只甲カ所謂侵入セシ土地ハ是レ天下ノ道路ナリトノコトノ  
 ミヲ答ヘ其道路ノ土地タル如何シテ道路ニ變セシヤヲ記入  
 スルヲ要セサルモノトス更ニ之ヲ換言セハ其土地ノ果シテ  
 道路ナリトノコトヲノミ記スルヲ以テ足レリトス即チ訴答書  
 ノ目的トスル所ハ其一般ノ結果ニヨリテ現出スル所ノ事柄

原則第四

第四

類ヲ示スニアリ故ニ若シ之ヲ措キテ記入セサルコトアルト  
 キハ設令其事柄ノ由テ生セシ所以即チ證據ヲ記シ他ニ備ハ  
 ル所アリトスルモ其書類タル訴答書類ノ完全ナルモノトナ  
 スヲ得サルナリ  
 訴答書類ニ記入スヘキ適切ナル事柄ハ事實ニ於テ眞正ナリ  
 而シテ法律ニ於テ十分有効ノモノナラサルヘカラス  
 若シ其記入セシ事柄ニシテ眞ナラサル時ハ直チニ其眞ナラ  
 サルコトヲ以テ答辯シ又若シ其法律ニ於テ争點ヲ確ムルニ  
 足ルヘキ十分効力アルノ事柄ナラサル時ハ之ヲ法律上完全  
 ナラサルモノトシテ之ニ答辨スルヲ得ヘシ然リ而シテ若シ  
 其事實ニ於テ眞ナラサルノ答辨ヲナシ其實ニ然ルモノナル  
 コト明ナル時ハ茲ニ於テ争訟ヲ了ヘタルモノトス何トナレ

訴訟法

八十九

ハ原告ノ請求スル事柄ハ己ニ之ニ由リテ消滅ニ歸スレハナ  
 リ若シ又其法律ニ於テ充分ナラサル時ハ以テ法律ニヨリテ  
 直ニ其争訟ヲ定ルモノトス故ニ訴答書類ヲ認ムルモノハ此  
 事實ト法律トノ問題ニ關シ其正直又ハ充分ナラサルコトア  
 ル時ハ以テ其争訟ヲ結了スルモノナル事ヲ遺忘スヘカラス  
 訴狀認メ方ノ規則ニ就キ一々茲ニ其個條ヲ叙列スルコトヲ欲セスト  
 雖モ右ノ原則ニ由リテ明ナル如ク其目的ハ兩造ヲシテ其請求スル所  
 ニ適切ナル事柄ヲ明確ニ列記シ一ノ論點ニ歸着スルニ適切ナルノ道  
 ヲ得ルノ手續ヲ規定スルニアルナリ以上ノコトヲ換言セハ原告カ訴  
 狀ヲ記スルニ當リ先第一ニ被告ノ義務ノ依リテ起リシ事柄ヲ記シ然  
 シテ若シ被告ノ負ヒシ義務ニシテ一般人ニ對シ負フ所即チ毆打等  
 リシ時ハ法律ハ既ニ其責任ノ何物タルヲ知レルヲ以テ原告ニ於テ殊

答書ヲ認  
ルノ規  
則

ニ其義務ノ性質等ヲ記スルヲ要セサルナリ次ニ記スヘキ事柄ハ其被  
告ハ應サニ務ムヘキ責任ヲ破リタリトノ事ヲ支フヘキ十分ノ事柄是  
ナリ次ニハ原告カ爲メニ蒙リシ損害ノ結果ト及ヒ其多寡トヲ記シ終  
リニ於テ其請求セントスル所ヲ記スヘキモノトス  
今契約ノ例ヲ引キテ之ヲ説カンニ茲ニ甲乙二人アリ甲ハ乙カ破約ヲ  
訴ヘンニ第一甲乙共ニ契約ヲ結ヒタル事第二乙ハ其約ニシ所ヲ履行  
セサリシ事第三爲メニ甲ノ蒙リシ所ノ害ハ何ナリヤ又其大小如何第  
四其損害ヲ辨償セシメンカ爲メ得ント欲スル所ノ請求如何ヲ記スヘ  
キナリ訴狀ノ次ニ來ルモノハ答書ナリ答書ノ性質ハ書キ方ニヨリ訴  
訟ヲ延滞セシメ又ハ論點ヲ得ルト失フトノ結果ヲ生スヘシ因テ答書  
ヲ認ムルノ規則ヲ論スルハ次ノ順序ナリトス其規則左ノ如シ  
第一 訴訟ノ后相手ハ必ス其訴狀タル法律ニテ不充分ナリト爲ル

答辨ヲ爲スカ又ハ訴狀ヲ拒絕スルノ答ヲ爲スカ又ハ其訴狀  
 ハ事實ヲ承認スルモ新タニ事實ヲ掲ケテ争ハサルヘカラス  
 第二 相手ニ於テ己レカ陳述シタル事實ヲ拒絕スルトキハ必ス茲  
 ニ論點ヲ定メサルヘカラス  
 第三 相手ノ掲出シタル論點適切ナルモノナル時ハ之ニ應セサル  
 ヘカラス

右三則ノ大畧ヲ陳ヘンニ第一ノ規則ニ訴狀ニ記シタル事實ニシテ法律  
 ノ以テ充分ナリトスルモノナラサルトキハ第一則ニ依リテ以テ茲ニ争  
 フヘキナリ而シテ若シ兩造ノ争フ所事實ニ歸スル時ハ第一則ト第二  
 則ニ因リテ事實ノ争點トシテ論點ヲ定ムヘキモノナリ而シテ第三則  
 ニ因ル時ハ其論點タル事實ニ歸スルト法律ニ皈スルトヲ問ハス之  
 ニ因リテ以テ應シ必ス茲ニ論點ヲ甘結スヘキモノトス

右ノ規則ヲ學ハント欲セハ答辨ノ性質ト其種類トヲ論セサルヘカラ  
 ス凡ソ答辨ニ二種アリ一ハ其結果タル只對審ヲ延引セシムルニ止マ  
 ルモノ二ハ訴訟ヲ結了スルノ効アルモノ是レナリ(第一種ノ説明ハ本  
 章ニ必要ナラサルヲ以テ暫ク之ヲ略ス)

訴訟ヲ結了スルノ効アル答辨ハ其訴狀ニ答ヘシモノニシテ之一對シ  
 テ下セル判決ハ則チ兩造間ノ爭ヲ裁判スルモノナリ又此事件即チ同  
 事件ニ就テハ再訴スルノ權ヲ消滅スルモノトス然リ而シテ此答辨ニ  
 三類アリ(第一)原告ノ訴狀ニ記入セシ事柄ノ全部若クハ其要部ノ真正  
 ナラサルヲ答辨スルコト之ヲ名ケテ事實ヲ拒絕スルノ答辨ト云フ(第  
 二)訴狀ニ記入シタル事柄ノ真正ナルハ被告ニ於テモ之ヲ認了スト雖  
 モ其事件タル法律ニ於テ要スル所ノ出訴ノ理由ヲ示スニ十分ナラサ  
 ルコトヲ以テスルモノ即チ原告ハ其自カラ提出セル事柄丈ケヲ以テ

請求スル理由ナシトノ答辨スル之レヲ名ケテ「法律ノ答辨」ト云フ(第三)
 訴狀ニ記載シタル事柄ノ眞正ナルハ之ヲ認了スト雖モ他ニ或ル事柄
 アリテ其訴狀ニ記載シタル事柄ノ効力ヲ消滅スルノ力アリトノ答辨
 是レナリ之ヲ名ケテ「事實ヲ承認スルモ更ニ新事ヲ提出スルノ答辨」ト
 云フ今此三類ノ答辨ヲ説明スルニ例ヲ以テセンニ甲ハ乙ニ向ヒテ乙
 ハ新平民ナリトノ事ヲ言ヒシニ依リ乙ハ甲ニ讒謗セラレタリトノ訴
 ヲ起シタリ於是甲ハ之ニ答へテ曰ク余ハ乙ニ向ヒテ新平民ナリトハ
 曾テ發言セシ事ナシト是レ即チ第一類ノ答辨ナリトス若シ甲ハ其乙
 ニ向ヒテ乙ハ新平民ナリト言ヒシハ實ニ甲自ラノ言ナリキ然レトモ
 之ヲ以テ法律上ノ讒謗ト爲ヌヲ得スト云フ時ハ是レ第二類ノ答辨ナ
 リトス然シテ甲若シ之ニ答へテ余ノ新平民ナリト云ヒシコトハ余ニ
 於テ自カラ之ヲ知ル然レトモ乙ノ新平民ナルコトハ眞實ニシテ敢テ

余ハ新平民ナラサル者ニ向ヒテ新平民ナリトノ譏謗ヲ爲シタルニア  
 ラスト是レ即チ第三類ノ答辨ナリトス  
 前ニ述ヘタル如ク訴答書類認メ方ノ規則ヲ設定セシ目的ハ争點ヲ定  
 ムルニアリ然シテ之ヲ定ムルニハ即チ上ニ述ヘタル訴答書類認メ方  
 規則ノ詳密ナルモノト之レニ對スル二種三類ノ答辨トニ據リテ探究  
 論議スヘキモノトス  
 以上ヲ以テ答辨ノ何物タルヲ畧述セリ然レトモ若シ二種三類ノ答辨  
 ナ以テ其事柄ノ眞ナルコトヲ證スルトモ之ニ付テ更ニ一ノ争ヲ起シ  
 再三再四之カ答辨ヲ爲スコトアリ此場合ニ於テハ二種三類ノ答辨中  
 其一ヲ擇ミ以テ終ニ論點ヲシテ一ニ歸定セシメサルヲ得ス此ノ如ク  
 シテ來ルヘキノ論點ハ一方ニ於テ其眞ナルコトヲ主張シ他ノ一方ニ  
 於テ之ニ反スルニ其偽リナルコトヲ以テスル所ノ事實若クハ法律ノ

問題ナリトス(兩種問題ノ何物タルハ茲ニ之ヲ畧ス明法誌林第九十八號ヲ參觀ス可シ)  
事實ト法律トノ問題ヲ問ハス之ヲ裁判セシ以上ハ即甲カ乙ヲ新平民ナリトハ云ハサリシコトニ裁決セシ時ハ乙ハ其損害ヲ甲ニ向ヒテ請求スルヲ得ス若シ又甲ハ乙ヲ新平民ナリト云ヒシモ其事實タル訴權ヲ支フルニ十分ナラス又ハ其事實ノ真正ナルカ爲メ法律上ノ讒謗ナラスト判決セハ原告ノ請求立ダスシテ即チ出訴スルニ足ルノ事柄ヲ有セサルモノトス  
始メ此規則ヲ發明セシ所ノ目的タルヤ訴答書類ヲ書クニ當リ常ニ裁判ノ基礎トナルヘキ事柄ニ付キ兩造爭フ所ノ法律ノ點又ハ事實ノ點ヲ繰出シ一方ニ於テ之ヲ爭ハントシ他方ニ於テハ之ニ應シテ論點ヲ得ルニアリ原語之ヲ(一)いしゆらト云フナリ

夫レ(いしゆう)ハ必ス其訴訟ノ問題ニ適切ナルモノナラサルヘカラス  
若シ其適切ナラサルモノナル時ハ無用ノ長物ニ屬スルノミ尙ホ之ヲ  
詳言セハ訴狀ノ書キ方ハ無用ノ争點ヲ除キ有用ナル争點ヲ書クニア  
リ故ニ論點ハ最適切ナルヲ要ス  
訴訟ハ都合ニヨリ適切ナル争點ニシテ一個以上生スル事アリ例ヘハ  
契約ノ履行ヲ訴フルニ當リ一方ニアリテハ被告ニ契約履行ヲ釋放シ  
タリト云ヒ又被告カ契約ヲ結ヒタル時脅迫ニ因リテ締結シタル者ナ  
ルヲ以テ無効ナリトスルコトアル是ナリ然レトモ其孰レヲ以テ答辨  
スヘキヤヲ定ルハ獨リ應答記者カ左ノ規則ニヨリ之ヲ定ムルコトア  
ルノミ  
若シ二個ノ争點アル時ハ其二個共ニ判決ヲ爲サ、ルヘカラス然ルニ  
前文ノ例ノ如キ一ノ訴訟ニシテ二個ノ争點ヲ生スルモ其一孰レカヲ

定ムルトキハ訴訟ヲ決スルニ充分ナリトス即チ契約コシテ始ヨリ無効ナリト判定スルトキハ茲ニ其訴訟ヲ決スルヲ得ヘキモノナレハナリ故ニ何ノ訴訟タルヲ問ハス其現狀ヨリ之ヲ觀レハ一個以上ノ論點ヲ有スルカ如クナルモ能ク其起源ニ遡リ之レヲ審按スレハ必ス一ノ論點ニ據リテ之ヲ決スルヲ得ヘキモノナリ故ニ論點ハ單一ナルヲ要ス

又眞正ノ論點ヲ得ントセハ暗中ニ物ヲ搜索スルカ如キ漠然ニ事實ノ記入ヲ爲スヘカラス必ズ其詳細ナルヲ要ス故ニ訴訟法規ノ要スル所ハ第一ニ原被ノ論點ヲ決スルニ至ラシメ次に之レヲシテ適切ナラシメ次に之レヲシテ單一ナラシメ次に之レヲシテ詳細ナラシムルニアリ此他尙ホ陳辨ノ曖昧ナルコトヲ省キ審理延滞ノ患ヲ減スルコトヲ勉ムヘキナリ

次ニ説明スヘキハ事實ト法律ノ問題ナリ  
 凡ソ裁判所ニ於テ訴訟ヲ受理セシ以上ハ審理ノ未必ス被告ヲシテ其  
 負擔スル所ノ義務ヲ履行セシメ或ハ被告ヲ罰シ或ハ法律ヲ犯シタル  
 カタメ生セシ所ノ損害ヲ償ハシムルノ處分ヲ爲サ、ルヲ得ス然リ而  
 シテ此三種ノ裁判ヲ下スノ前ニ當リ之カ裁判官タル者第一ニ明カニ  
 スヘキ所ハ原告カ訴出セシ所ノ被告カ負擔セル義務ハ果シテ現存ス  
 ルヤノコト第二ニ被告ハ果シテ其負フ所ノ義務ヲ履行セザリシヤ否  
 ヤノコト是ナリ  
 凡ソ法律ノ人民ニ對シテ定ムル所ノ義務ハ其人々ノ位地ニ依リテ異  
 同アリ例ヘハ惡犬ヲ畜フニ付キテ注意ヲ用フヘキ義務又ハ銃砲ヲ貯  
 藏スル人ノ注意スヘキ義務ノ如キハ只其犬ヲ飼ヒ銃ヲ貯フル人ノミ  
 ニ關シテ存在スル者ナルカ故ニ之ヲ特別ノ義務ト云フ而シテ一般ノ

義務ハ人ヲ害スル勿レト云フ然レトモ時トシテハ正當防衛ニヨリテ  
人ヲ害スルコトアリ其他謀殺故殺過失殺等ハ均シク人ヲ害スルモノ  
ナリト雖モ其人々ノ位地ニ由リテ之ヲ問フト問ハサルノ別アリ從フ  
テ又罪ニ大小アリ罰ニ輕重ノ別アルカ如シ其他民事ニ於テモ犯法者  
ノ當時ノ當情如何ニ由リテ損害ノ義務ニ多少ノ差異ヲ生スルモノト  
ス夫レ此ノ如ク人々ノ位地ニ由リテ其義務ノ程度ヲ異ニスルカ故ニ  
裁判官タルモノ一ノ判決ヲ與ヘ以テ法律ノ委スルトコロヲ被告ニ於  
テ履行セシムルニハ左ノ問題ノ幾部若シクハ全部ヲ精究セサルヲ得  
ス

第一 被告ノ位地

第二 若シ果シテ原告ノ請求スル所ノ義務アリトセハ被告ハ第一  
ノ問題ニ就キテ定ムル所ノ位地ニ居リ其義務ヲ負フヤ否ヤ

第三 被告カ爲シタル所ハ如何又爲サ、ル所ハ如何

第四 被告カ爲シ若クハ爲サ、ル所ハ果シテ義務ヲ破リシモノト云フヘキカ

第五 被告カ義務ヲ破リシカ爲メ生セシ所ノ結果ハ如何及ヒ由テ生セシ損害ノ性質ト其高トハ如何又或ル場合ニ於テ被告カ爲シ若クハ爲サ、ルノ當時其心況ハ如何即チ善意ナルヤ惡意ナリヤ

第六 此ノ如キ場合ニ於テハ如何ナル罰ニ處スヘキカ如何ナル損害ノ辨償ヲ命スヘキカ

上ニ列舉セシ第一第三第五ノ問題ヲ定ムルハ全ク事實ニシテ其第二第四第六ハ法律ノ問題ナリトス法律ノ問題ハ政府カ豫定セシ所ノ法律ニ由リテ之ヲ定ルヲ得ヘシト雖モ事實ノ問題ハ時ト場合トニ由リテ變更スル者ナルカ故ニ之ヲ豫定スルヲ得ス然シテ法律ニ於テ定ム

ル場合ハ只如何ナル手續ニ由リテ事實ノ審理ヲ執行スヘキヤノコト  
 タルニ過キサルナリ  
 左ニ刑法契約法私犯法ニ關スル所ノ例ヲ舉ケテ前文ノ意ヲ説明スヘ  
 シ  
 第一甲ハ鐵砲ヲ以テ乙ヲ殺シタリトセンニ此ノ場合ニ於テハ前ニ述  
 ヘタル第一ヨリ第六迄ノ問題ヲ悉ク適用スルヲ要セサルナリ即チ其  
 第一ハ此ノ場合ニ問フヲ要セス何トナレハ凡ソ人ヲ殺ス勿レトハ法  
 律ノ一般ニ命スル所ニシテ即チ刑法ナルモノアリ故ニ甲ハ特別ノ位  
 地ヲ占ムルヨリシテ生スルノ義務ヲ負フモノニアラサルヲ以テ之ヲ  
 訴出スルカ爲メ特ニ他ノ事柄ヲ提出スルヲ要セス即チ判官ハ直チニ  
 第二ノ問題ニ移リテ審理スヘシ何トナレハ刑法ハ社會一般ノ法律ニ  
 シテ判官ハ甲カ犯セシハ社會一般ニ對スル天下ノ法律ナルヲ知レハ

ナリ  
 次ニ第二ノ問題ニ移リ法律ニ於テ定メタル正當防衛及ヒ其他ノ特別  
 ナル事情アルノ外甲カ乙ヲ砲殺スヘカラサルノ義務ヲ負ヘルヤヲ詳  
 カニサセルヲ得ス  
 次ニ第三ノ問題ニ於テ探窮スヘキコトハ果シテ甲ハ砲撃セシヤ且ツ  
 其砲撃ノ所爲ハ刑法通則ニ於テ人ヲ殺傷スルコトヲ禁セシ例外ノ場  
 合ニ於テ爲セシモノナルヤノコトナリ第四ノ問題ハ其砲殺ノ所爲カ  
 果シテ甲ノ負フ所ノ義務ニ違背セシヤニアリ第五ニ於テ問フヘキコ  
 トハ此砲殺ハ果シテ乙ノ死ヲ來シタルモノナリヤ又甲カ砲殺ノ所爲  
 アリシ時ニ當リ其意思ハ如何即チ刑法ニ於テ刑罰ヲ論スルニ當リ其  
 懲罰ノ輕重ハ結果ニ由ラスシテ多クハ犯罪者ノ意思ノ有様ニ由リテ  
 之ヲ定ムルモノトス故ニ此問題ハ彼ノ民事犯ノ損害要償ノ高ヲ定ム

訴訟法

百三

ルト同一ノ位地ニアルモノトス第六ノ問題ハ以上ノ問題定マリシ後  
ニ於テ果シテ之ニ刑罰ヲ科スヘキヤ若シ果シテ刑罰ヲ科スヘキモノ  
トセハ如何ナル刑罰ナリヤノコトヲ定メ然ル後ヲ始メテ之カ裁判ヲ  
下スヲ得ヘキナリ

以上ハ刑法ニ關スル問題ヲ採リテ彼ノ六箇ノ問題ヲ説明セシカ次ニ  
ハ契約ノ問題ヲ擧ゲテ之カ適用ヲ説述スヘシ

甲ナル製造會社アリ期限ヲ定メテ乙ニ其製造品ヲ引渡スノ約アリシ  
ニ中途ニシテ甲ハ其期限通り履行ヲ爲サ、リキ此事實ニ就キテ彼ノ  
六箇ノ問題ヲ適用セハ即チ左ノ如キ研窮ヲ爲ス可キナリ

第一問題ノ下ニ於テ問フヘキコトハ果シテ甲乙ノ間ニ此契約アリシ  
ヤ否ヤノコト是ナリ若シ契約法ノ目的ハ何人ト雖モ一ノ契約ナル所  
爲ニ由リテ法律上ノ關係ヲ生セントシ若クハ此關係ヲ生セシモノ、

- 二 Acceptance
- 三 Proposal
- 四 Consideration.

争訟ヲ起シタル時ニ當リ之ヲ斷定スルノ規則ヲ集メタル者ナルカ故  
 ニ之ヲ社會一般ヨリ觀ルトキハ特別ノ事柄ニ属スルヲ以テ問ハスシ  
 テ當然契約アリシモノト認定スルヲ得ス即チ其果シテ契約アリシヤ  
 否ヤヲ定ムヘキナリ而シテ之ヲ定ムルニハ<sup>三</sup>「ふるば」<sup>ニ</sup>「わくせぶ」<sup>ニ</sup>  
 んすノ問題ニ就テ研窮セサルヲ得ス即チ是レ事實ノ問題ナリトス  
 第二ノ問題ニ於テ論スヘキコトハ甲乙ハ其契約ヲ結ヒシカ爲メ果シ  
 テ其義務ヲ負フヤ否ヤニアリ<sup>四</sup>「こんしどれ」しよん資格同意目的等ノ  
 如キヲ定ムルモノニシテ重ニ契約ノ効力及ヒ其説明ノ規則ニ就テ研  
 窮スヘキコトナリトス  
 第三ノ問題ハ此契約ニ就キテハ甲會社カ製作物品ノ引渡ヲ誤リシカ  
 右ノ問題ヲ研窮スル所以ノモノハ固ト契約ハ此等ノコトニ關シ或ハ  
 之ヲ無効トシ或ハ之ヲ取消シ得ヘキノ結果ヲ生スルヲ以テ先ツ之ヲ

審究スルニアラサレハ其契約ノ關係ノ果シテ如何ナルヤヲ知ルヲ得  
 カルニ由ルナリ  
 第四ノ問題ハ然ラハ其所爲ハ果シテ契約ニ違背シタルモノナリヤ即  
 チ是ヲ定ムルニ<sup>五</sup>ぶろみす及ヒ説明ノ規則ニ就テ探窮スヘキナリ  
 第五ノ問題ハ乙ハ甲ノ契約ニ違背セシカ爲メ如何ナル損害ヲ被リシ  
 ヤ是レ事實ノ問題ナリトス  
 第六ノ問題ハ其損害ヲ償フカ爲メ契約者ハ豫メ損害高ヲ定メシヤ又  
 之ヲ定ムルニ如何ナル言語又ハ文字ヲ用ヒシヤ即チ是レ法律ノ問題  
 ナリトス  
 次ニ私犯ノ問題ヲ採リテ説明センニ甲ハ牧畜場ノ柵欄ノ修覆ヲ怠タ  
 リシカ爲メ其家畜逸シテ通路ニ出テ又乙ノ園中ニ侵入シ大ニ乙ニ損  
 害ヲ加ヘタリ依テ甲ニ對シ損害要償ヲ訴ヘタリ

此場合ニ於テ六問題ノ適用ハ次ノ如シ  
第一問此問ヒノ起ル所以ノモノハ凡ソ法律ハ財産法ヲ定メ以テ財産  
ヲ有スルモノ、義務ヲ規定シ又社會一般人ノ其財産ヲ有スル人ニ對  
スル權利ヲ規定スト雖モ法律ヨリシテ觀ルトキハ或ル一箇人ハ如何  
ノ財産ヲ有シ如何ノ權利ヲ握ルヤヲ知ルヲ得ス故ニ又之ヲ規定スル  
ヲ得ス是ニ於テカ第一ノ問題ヲ探窮スルノ必用ヲ生スルモノトス第  
一問ノ下ニ於テ問フヘキコトハ甲ハ牧畜場ノ所有主ナリヤ又家畜ノ  
所有主ナリヤ甲ハ其家畜ヲ牧畜場ニ放チシヤ又柵欄ノ破レシ事情ノ  
外他ニ家畜ノ通路ニ逸スルノ狀況アリシヤ此場合ニ於テ相當人トシ  
テ如何ノ注意ヲ其破柵ニ用フヘキヤ等ノ事實ヲ研究スヘシ  
第二問第一問ニ於テ定メシ所ノ事情アルニ當リ甲ハ果シテ其注意ヲ  
用フヘキノ義務ヲ負ヒシカ

第三問 甲ハ果シテ其注意ヲ用キシヤ否ヤ

第四問 其注意ヲ用ユルコトヲ怠タリシハ果シテ甲ノ負フ所ノ義務ニ違背セシモノナリヤ

第五問 柵欄ハ果シテ破損アリシヤ又其破損ハ甲ノ用フヘキ注意ヲ加ヘサリシニ由ル者ナリヤ家畜ハ果シテ破柵ヲ越ヘテ逸出セシヤ又其家畜ハ乙ノ園中ニ侵入セシヤ其園中ニ於テ家畜ハ如何ナルコトヲナセシカ終リニ其家畜ノ爲メ乙ノ蒙リシ損害ヲ金錢ヲ以テ計算スルトキハ其高如何

第六問 ハ果シテ第五ニ於テ定メシ所ノ損害金ヲ拂フヘキノ命ヲ受クシヘキモノナリヤ果シテ然ラハ其全額ヲ拂フヘキヤ或ハ幾部ヲ拂フヘキヤ

以上六問題ヲ説明スルカ爲メ刑法契約法私犯法ノ問題ヲ採リシカ其

何レノ問題ナルヲ問ハス第一第三第五問ノ下ニ來ル所ノ種々ノ問題ハ法律規則ノ定メ得サルモノニシテ又其裁判ヲ掌理スル判事ニ於テ豫メ其問題ノ如何ヲ定ムルニ足ルノ事實ヲ知得スル者ニ非ス故ニ其審問ヲ遂クヘキモノナリトス然リ而シテ事實ノ審問ヲ遂ケ此三問題ヲ確定不動ノモノト爲ス以上ハ法律ニ明通スル判事ハ直チニ第二第四ノ法律ニ關スル問題ヲ定メ終リニ第六ノ問題ヲ決定スルヲ得ヘシ即チ此ニ至テ始メテ訴訟ノ裁判ヲ下スヲ得ルモノトス故ニ訴訟ヲ審理スルニ當テハ事實ノ問題ト法律ノ問題トヲ定ムルノ須要ナルコト及ヒ其問題ノ要スル所ノ何タルコトハ諸君ハ此ニ於テ知得セラレシヲ信ス然ルニ此二種ノ問題ハ悉ク判官必ス之カ審理ヲ掌理スルモノナリヤ否ヤヲ探究スルニ英法ヲ基本トセシ邦國ニ於テハ事實ノ問題ハ之ヲ陪審官ニ任シ法律ノ問題ハ之ヲ判事ニ掌ラシム之ニ反シ羅馬

法ヲ基本トシタル邦國ニ於テハ判事ハ二種問題ノ審理ヲ掌リ即チ佛國及ヒ其法理ヲ基本トシタル我日本國ノ如キハ皆然ラサルハナシ蓋シ二種ノ問題ヲ定ムル之ヲ分任スルト否トチ問ハス凡ソ審理ヲ遂クルニ於テハ最モ之ヲ明白ナラシムルヲ主要トス即チ第一事實ヲ審理シ第二法律ヲ適用スルノ順序ヲ誤ラサレハ訴訟ノ運轉スル速カニシテ復タ淹滯ノ恐レナカル可シ故ニ苟モ訴訟ニ從事スルノ判事若クハ代言人ハ常ニ此二種ノ問題ヲ記憶シ之レカ順序ヲ忘却スヘカラス余想フニ現今日本ニ於テ訴訟事件ノ淹滯スル所以ノモノハ官民共ニ訴訟手續ト證據法トノ暗キニ原因スルコト多カルヘシト信ス而シテ其訴訟手續ヲ論シ又證據法ヲ説クニ於テモ常ニ二種ノ問題ヲ腦裏ニ深ク記憶シ之ヲ忘レサルニ於テハ之ヲ論スルニ際シ領解スルコト甚タ容易ナルモノアルヘシ

第七回

是迄ニテ何ヲ目的トシテ訴答書類ヲ認ムヘキカ而シテ之ヲ認ムルノ規則如何又事實ト法律ヲ區別シテ爭點ヲ定ムヘキヲ示シ且ツ其區別ヲ説明セリ是ヨリ進テ訴答書類ニ關スルノ規則ヲ説明セントス先ツ訴答狀雛形ヲ掲ケ其詳細ヲ述ヘシ其雛形左ノ如シ

訴狀

(訴狀ノ雛形)

番號 二十四號  
 裁判所ノ名 東京府裁判所  
 何年何月何日ニ召喚狀ヲ發セリ  
 原告 〇〇〇  
 被告 〇〇〇

## 訴狀

第一條 明治十八年三月三日被告ハ日々新聞へ菓子製造ノ商業株ノ賣却並セテ右商賣ニ關スル店ノ地所建具飾付一切得意先及商賣道具一式ノ賣却ノ廣告ヲ爲セリ而シテ右ノ菓子商業ハ益繁榮スルモノニシテ毎月二十圓以上ノ商賣ヲ爲セリ其虛實ハ丙ニ就テ問合スヘシト記載セリ

第二條 原告ハ第一條ノ廣告ヲ見テ丙ニ面會シ而シテ丙ハ原告ニ紹介シテ双方相談ヲ遂ケ被告ハ原告へ通三丁目五番地ナル菓子商業株及其地所建具飾付一切得意先及商賣道具一式ヲ賣却スルコトニ付キ相談アリタリ

第三條 右相談ニ際シ被告ハ每度右菓子商賣ハ茲ニ繁榮ニ相成リ毎月二十圓以上ヨリ多分ノ商賣アリタルコトヲ告ケタリ

第四條 同年四月廿日原告被告ノ第三條記載スル所ノ言ヲ信シ被告  
 ヨリ二千五百圓ノ代價ヲ以テ前文ノ商賣ニ係ル一切ヲ買フコトヲ約  
 シ右買入ノ手金トシテ被告ヘ金一千圓ヲ仕拂ヘリ  
 第五條 同年四月二十五日右賣買ノ手續ヲ完了シ土地讓渡ヲ了リ代  
 金殘額ヲ相渡シ同日ニ原告ハ右菓子商業ヲ引取レリ  
 第六條 其後幾モナク原告ハ右ノ商業タル之ヲ買入ル、ニ付相談約  
 定及其手續ヲ完了シタル時ニ當リテ既ニ久シク衰ヘタルノ商賣タリ  
 シ事ヲ發見セリ而シテ右ノ間ニ於テ並ニ其以前該商賣ノ月々ノ上リ  
 高ハ僅々十圓ニ過キサルコト且右商賣ハ唯二千五百圓ノ價ナキノミ  
 ナラス少モ賣買ノ價値ナキモノナルコトヲ發見セリ  
 第七條 被告ハ前文ノ如ク原告ヲシテ其言フ所ヲ以テ前文ノ買入ヲ  
 爲サシメシメカ爲メ原告ヲ詐リ且詐僞ヲ以テ之ヲ知リナカラ不實ノ陳

答書

述ヲ爲セリ  
前條々ノ次第ナルヲ以テ被告ハ原告へ金三千圓ノ損害辨償アラシ  
トナ請求候也

(答書ノ雛形)

番號

裁判所ノ名

原告

被告

答書

第一條 被告曰ク原告訴狀ノ第三條ニ記シタル陳述ヲ爲シタル時原  
被兩造ノ間ニ賣買ヲ相談シタル時間及右賣買ヲ完了シタル時及被告  
ヨリ原告へ右商賣一切ヲ引渡シタル時ニ於テモ益該商賣ハ繁榮ノ景

再答書

況ニシテ毎月二十圓以上ノ商賣アリタリシ故ニ訴狀第六條記入ノ事柄ヲ認メス  
第二條 菓子商業株ノ賣買ヲ相談スルニ當リ被告ニ於テハ屢原告ハ被告ノ陳述ニ依リ取引ヲ爲スヘカラス必ス自ラ右商賣ノ價及商賣高ヲ取調フヘキコトヲ戒メタリ而シテ之ヲ取調ヘシムル爲メ被告ハ原告ヘ被告ノ右商賣ニ關スル正實ニ證明シタル一切ノ計算帳簿ヲ原告ヘ渡シ原告ハ之ヲ見且検査掛戌ヲシテ逐一検査セシメタリ而シテ原告ハ戌ノ見込并ニ取調ノ結果ニヨリテ買入ヲ爲シタルモノニシテ毫モ被告ノ陳述ヲ信シテ買入ヲ爲シタルモノニアラス  
前條々ノ次第ナルヲ以テ被告ハ原告ノ請求ニ應シ難ク候也

(再答書ノ雛形)

番號

訴訟法

百十五

七一

七〇

裁判所ノ名

原告 〆、ひ

被告 〆、ひ

原告ハ被告ノ答書ニ依リテ論點ヲ定ムルモノナリ  
年月日 〆、ひ 被告代理人 何某

訴答書類ノ雛形如此之ヨリ一々其何モノタルヲ説明スヘシ  
訴答狀トハ訴訟審問ノ前ニ原告、被告各書付テ以テ其主張スル所ヲ示  
シ對手ノ主張セントスル所ニ答ルカ爲メ相互ニ提出スル所ノ書類ヲ  
云フナリ  
今マ其順序ヲ云ヘハ先ツ通例ニテハ原告ノ訴狀アリ之ニ對シ被告ノ  
答書アリ更ニ原告ノ再答書アリ以テ訴答ノ手續ヲ完了ス然レモ昔時  
ヨリ三回以上五六回ニ涉リテ互ニ訴答スルノ例尠ナシトセス去レハ

必シモ再答書ヲ以テ訴答ノ手續ハ完了スヘキモノニアラス  
雖然實際上ヨリ之ヲ觀ルキハ原告ノ再答書アリタルキハ於是通例訴  
訟ノ論點ヲ定ムルニ足ルモノナリ現ニ英米ノ法庭ニ於テハ三回目ノ  
答書即チ再答書ヲ以テ訴答ノ手續ヲ了ルヲ通例トナセリ  
何故ニ如此訴答ヲナスニ訴答書類ヲ要スルヤト云フニ蓋シ其書類ノ  
必要ナル所以ハ(第一)各其事柄ヲ舉ケ一方ニ於テ主張スル所ト他方ニ  
於テ拒絕スル所トヲ明カニシ兩造ニ於テ何レノ點ヲ證明ス可キヤヲ  
定メ以テ判事ヲシテ審判ノ助ヲ得セシムルニ必要ナリトスルニ在リ  
第二加之順次着々論點ノ事實ノ舉カルヲ觀テ原告ハ如何ナル法律ニ  
ヨリ此事實ニ効力ヲ有セシメントスルモノナリヤ判事ヲシテ法律上  
ノ問題ヲ接出セシムルノ便宜ヲ得セシムルニ必要ナリトスルニ在リ  
故ニ訴答狀ノ要ハ之ヲ畧言スレハ單ニ事實ヲ明ニシテ訴訟ノ爭點ヲ

發見スルカ爲メ必要ナルノミナラス併セテ法律ノ適用スヘキ點ヲ發  
 見スルコト便宜ナラシムルカ爲メナリト謂フ可シ  
 此ノ如クシテ訴答狀ニ依テ原被兩造各其主張セントスル事實ヲ決ス  
 ルノ論點ヲ擧ケ其結局對手ノ主張スル所ノ事實全ク眞正ナラスト認  
 ムルモハ之ヲ拒絕スルモノトス即チ訴答ノ手續茲ニ終局ヲ告クルナ  
 リ然レモ若シ對手ノ主張スル所ノ事實ハ眞正ナラサルニ非スト雖モ  
 法律ノ力ヲ貸スニ足ラサルモノト認ムルカ又ハ其法律ノ力ヲ藉ルニ  
 足ル丈ノ順序ヲ盡サ、ルモノト認ムルモ之ニ乘シテ爭ハント欲スル  
 モハ法律上無効ナル旨ヲ述ヘ之ヲ拒絕スヘシ故ニ訴答ノ手續ヲ結了  
 スル論點ニ二點アリ即チ事實上ノ論點及ヒ法律上ノ論點是ナリ  
 凡ソ訴訟ヲ判決スルニハ事實ノ信否ヲ以テスルコトアリ或ハ法律上ノ  
 問題即チ法律上此事實ハ果シテ如何ナル効力ヲ付セラルヘキヤノ點

ナ以テスルコトアリ是訴答ニ於テ先ツ事實法律ノ二論點ヲ定ムルヲ必  
要トスル所以ナリ  
茲ニ訴答法ニ就キ少シク沿革ヲ案スルニ昔時ニ在リテハ近時ノ如ク  
一々書類ヲ以テセス原被告各言語ヲ以テ論述セシモノナリ而シテ當時  
ニ於テハ裁判所ノ書記ハ悉皆之ヲ筆記シテ以テ判決スルノ便ニ供シ  
タリシ然レモ今ヲ距ルコト凡ソ二百年前ヨリ訴訟益々繁多ニシテ人事  
亦愈々錯雜ヲ極ムルニ至リ到底口頭ノ陳辯ニテハ裁判上不便甚ナカ  
ラサルヲ發見シ遂ニ言語上ノ訴答ヲ廢止シ一々書類ヲ以テ訴答スル  
コトナレリ故ニ此時ヨリ判事ハ唯訴答書類上論點ノ定マリタル上ニ  
就テ之カ判決ヲ下スニ止リ別ニ判事自ラ論點ヲ見出スコトノ要ナキニ  
至リシモノナリ然レモ此ノ如クスルキハ書記ハ一々訴答書類ヲ寫取  
リ之ヲ雙方ヘ示サ、ルヘカラサルヲ以テ其煩雜甚シク到底今日ニ至

テハ其手數ノ煩ニ堪ヘサルヲ發見シ竟ニ訴答書類ノ如キ其肝要ナル  
 モノ、ミ裁判所ニ於テ所藏スルコトナレリ故ニ今日ニ於テハ裁判所  
 記録中別ニ對審ノ委曲ヲ盡セルモノアルコトナシ從テ判事ハ訴答書類  
 ト口頭ノ辯論トニ依テ決スヘキ論點ヲ自ラ量定シ以テ始メテ判決ヲ  
 下スノ慣例ナリ  
 蓋シ本邦ニ於テハ大抵訴答狀ヲ作ルニ唯對手ノ落度ニ乘スルヲ是務  
 ムルモノ多ク而シテ論點ヲ定ムルノ必要ヲ知ラサル者多キカ如シ加  
 之裁判ヲ與フル者モ徒ラニ審問ニ時日ヲ費シ必要ナル論點ヲ定ムル  
 コトヲ忘却スルカ如キモノ往々ニシテ之レナキニ非ラス看ヨ此論點ヲ  
 誤リ大審院ニ至テ破毀セララル、コト數々アルコト故ニ論點ヲ定ムルハ  
 訴答ニ於テ最モ必要トス請フ諸君幸ニ諸ヲ忽ニスル勿レ  
 是ヨリ以下訴答書類ノ何タルヲ細説スヘシ

(第一) 訴狀、訴答ノ手續中第一ニ説クヘキハ原告ノ訴狀ニシテ其訴狀中ニ通例記載スヘキ事柄ハ第一原告カ訴フル所ノ根據タル事實、第二被告カ其事柄ニ對シ犯シタル所爲、第三被告ノ所爲ニヨリ原告カ蒙ムリタル所ノ損害、第四其損害ニ對シ原告ノ請求要領等是ナリ但シ訴訟ノ性質ニヨリ各異同ナキニ非スト雖モ通例右ノ範圍ノ外ニ出テサルモノトス其特別ノ場合ハ別ニ之ヲ述ヘン

(第二) 答書、第二ハ被告ノ答書ニシテ答書ノ効力ハ既ニ畧説シタル如クニアリ其一ハ訴訟ヲ遅延セシムルニ在リ其二ハ訴訟ヲ結了スルニ在リ

其一種ノ答辯ハ必竟訴訟ノ本件ニ答フルニ非スシテ只訴訟ノ手續ノ法ニ違ヒタルカ又ハ管轄違ヲ以テ法則通手續ヲ更新セシメントスルモノニ外ナラサルナリ譬ヘハ二人連帶ノ義務ヲ破フリタルキ一人ヲ

被告トシテ訴出ツル時ニ於ケルカ如シ  
 其二種ノ答書ニ於テハ被告カ對手即チ原告カ主張スル所ヲ全ク拒絕  
 スルカ又ハ對手ノ言フ所ハ事實ナレトモ被告ニ於テ尙ホ之カ事實ヲ打  
 消スニ足ルノ事柄ヲ有セリト云フカ又ハ原告カ主張スル事柄タル眞  
 正ナルモ依テ以テ被告ヲ訴ヘ之ニ關スルノ義務ヲ負ハシムヘキモノ  
 ニアラスト云フニアリ  
 右第一ノ拒絕答書即チ事實ヲ拒絕スルノ答辨チナス場合ニ於テハ訴  
 狀ノ主要ノ部分ノ事實眞正ナラスト主張スルニ在リ  
 第二ノ打消答書即チ事實ヲ承認スルモ更ニ新事ヲ提出スル答辨チナ  
 ス場合ニ於テハ訴狀中掲ケサル事柄ノ原告ノ請求ヲ打破リ消却セシ  
 ムルモノアリト云フニ在リ譬ヘハ原告ハ約束手形ノ仕拂ヲ請求シ來  
 ルニ當リ被告ハ此ノ如キ約束手形ハ振出シタルヲナシト拒絕スルハ

第一ノ答辯ニシテ又該約束手形ハ振出シタルニ相違ナシト雖モ既ニ之ヲ渡シタルノ目的若クハ原因ノ消滅シタルヲ以テ仕拂ノ請求ニ應シ難シト答フルハ第二ノ答辯ナリトス而シテ原告ノ訴フル所ノ事實ヲ承認シテ尙ホ之カ請求ヲ拒ムモノ即チ右第二ノ答辯ニ二様ノ別アリ一ハ原告ノ申立ツル所ノ事柄ハ如何ニモ眞正ナレトモ被告カ之ヲ爲シタルハ其爲スヘキ原由若クハ權力アリ故ニ原告ハ訴フヘカラス(甲)ト云フニアリ一ハ原告ノ掲クル事柄ハ已ニ消滅シ去レリ(乙)ト云フニアリ

(甲)ノ場合ハ原告ノ申立ツル事柄ハ被告カ之ヲ爲スコトハ法律ノ許ス所ナレハ之ヨリ生スル損害ヲ償フノ義務ナキモノナリ故ニ原告ハ之ニ對シ爭訟スルノ權利ナシト主張スル如キ是ナリ譬ヘハ民事上讒謗アリト雖モ信實ナリシカ故ニ損害賠償ノ責ナシト陳辯スルカ如キ又ハ

毆打アルモ正當防衛ニシテ止ムヲ得サルニ出タレハ訴ヘラル、ノ義務ナシト答辯スルカ如キ是ナリ  
 又(乙)ノ例ハ負債返濟ノ契約ハ原告トノ間ニアリタレモ原告ハ既ニ被告ニ其義務ヲ許シタル事實アレハ被告ニ於テ前ノ契約ヲ履行スヘキ義務ナシト主張スルカ如キ是ナリ

(第三)再答書、第三ハ原告カ被告ノ答辯ニ對シ答フル所ノ再答書ナリ再答書ハ即チ被告カ答辯ノ仕方ニ應シテ夫々ニ答辯スルモノニシテ大抵ハ茲ニ於テ訴訟ノ論點定マルモノトス  
 右答辯ノ仕方其順序等ハ一般普通ノ定則ニシテ本邦ニ於テモ未タ一定ノ法式コソナケレ事實上一モ異ナルヘキモノニアラサルナリ  
 (第四)訴答狀ヲ出スヘキ期限及ヒ之ニ關スル雜件、  
 訴狀ハ原告カ出庭届ヲ出シテヨリ六週間内ニ出スヲ要ス

被告ニ於テ若シ原告ノ訴狀ハ之ヲ要セスト申出ツル時ト雖モ原告ハ自己ノ便利ノ爲メニ之ヲ被告ヘ渡スヲ得ヘシ但シ然ルキハ自ラ其費用ヲ負担セサルヘカラス

原告召喚狀ニ於テ請求裏書ヲナシ直チニ召喚狀ヲ以テ訴狀ニ代フルトナ記入シ置クキハ別ニ訴狀ヲ要セサルモノトス

訴狀ニ於テハ先ツ第一ニ番號、年、月、日、裁判所ノ名ヲ書シ次ニ原告ノ名、訴訟ノ事實、原告ノ被ムリタル損害ハ何々、原告ノ要求スル所ハ何々及ヒ其他本件ニ的當ナル救濟ヲ要スト記載スルヲ通例トス

答書ハ原告カ訴狀ヲ呈出シタルヨリ八日目ニ出スヲ要ス

答書ハ原告カ呈出シタル事柄ニ對シテ被告カ據テ以テ答ヘントスル事實ヲ掲グルモノナリ故ニ答書ノ目的ハ要スルニ原告カ呈出シタル事實ヲ拒絕シ又ハ其法律上ノ効力ヲ滅殺シ若クハ之ヲ消却セシメン

ト欲スルニ在リテ全ク其事實ヲ拒絕スルコトアリ又ハ其事實ヲ承認シテ其要求ヲ拒絕スルコトアリ然レモ到底爭フヘカラサル事柄ヲ答辯スルモハ被告自ラ其入費ヲ償ハサルヘカラス其論點外ノ事柄ニ渉ルモ亦之ニ同シ

又答書ヲ提出スルト同時ニ又ハ其前ニ原告カ要求スル金額ヲ仕拂ヒタリト云フヲ以テ答フルヲ得ヘシ此場合ニ於テハ被告ハ先ツ金額ヲ裁判所ヘ納メ裁判所ヨリ請取書ヲ得テ之ヲ原告代言人ニ渡サ、ルヘカラス而シテ原告之ニ満足セハ更ニ其後ニ費セシ所ノ訴訟人費ヲ被告ニ請求スルヲ得ヘシ

又被告、原告ノ要求ヲ過當ナリトスルモハ之ニ對シテ反求<sup>カウントレゼン</sup>ヲナスヲ得

反求ニ關スル現行法ニ於テハ何等ノ事柄ニテモ原告カ提出セル事件ニ關係アル事柄ナルモハ之ヲ提供シテ反求ヲナスヲ得ヘキモノトス

(但シ英國ノ現行法ニ於テハ別ニ制限ヲ設ケタルコトナキモ同性質ノ事柄ノミニ限り其性質異ナリタル事柄ハ假令關係アルモ反求スヘキ限ニアラサルトノ傾向アルモノト信ス)

又反求ヲナスニハ他ニ關係人アルキハ何人ニテモ之ヲ加ヘサルヘカラス

再答書ハ被告ノ答書ヲ提供シタルヨリ三週間内ニ出サ、ルヘカラス

再答書ニ於テハ答書ノ事柄ヲ拒絕スルカ又ハ之ヲ承認スルカ又ハ其事柄ヲ打壞ル爲メニ新タナル事柄ヲ提供スルカニ止マルモノナリ

(第五論點ヲ終結スル書付) 以上ノ手續ヲ經テ最後ニ要スルハ論點終結ノ書付コレナリ而シテ通例此書付ヲ原被雙方ヨリ提出スルヲ以テ訴答ヲ完結スルモノトス然レモ若シ被告ニ於テ更ニ再々答辯ヲ爲サント欲スルキハ其旨ヲ申陳ヘテ裁判官ニ其許可ヲ出願セサルヘカラス

若シ再答辯ニ至テモ尙ホ論點ノ定マラサルキハ判事ハ更ニ論點ヲ定メシムル爲メ互ニ答辯セシムルコトアリ又ハ判事自ラ論點ヲ定ムルコトアリ

(第六)法律上ノ問題ノ答辯、以上述へ來ル所ハタ、事實上ニ於テ爭フ場合ヲ説ケリ若シ訴答ノ中途ニシテ法律上ノ問題起リ之ニ答辯セシムト欲スルキハ別ニ裁判官ニ願ヒ出テ其許可ヲ得サルヘカラス即チ對手カ提出シタル事實ハ法律上効力ナキモノナリ之ヲ反言セハ原告カ提供セル事柄丈ニテハ法律上請求シ得ヘキ事柄成立セサルモノナリト主張セントスルキハ先ツ判事ノ許可ヲ得テ而シテ後チ答辯ヲ爲サ、ルヘカラス

若シ此ノ如クシテ對手右ノ法律上ノ答辯ニ依テ攻撃サレタルキハ最初ノ請求ヲ改正スルカ否レハ更ニ之ニ對シテ答辯ヲ試ミサルヘカラス

ス而シテ若シ改正ヲ爲サント欲スルモハ裁判官ニ願出テ更ニ許可ヲ得サルヘカラス但シ此場合ニ於テハ自ラ對手カ法律上ノ答辯ヲ爲シタルノ費用ヲ償ハサルヘカラス若シ又右孰レカノ途ニ依テカ答フルヲ決定メサルモハ一切ノ入費ヲ自ラ償却セサルヘカラス法律上ノ問題ニ就キ答辯セントスルモハ必ラス先ツ事實ヲ承認シタル後ナラサルヘカラス故ニ此答辯ヲ爲スモノハ事實ヲ承認シタルモノト認定ス

法律上ノ問題ニ就キ答辯シタルモ其一部分モ成立セスシテ敗訴スルモハ其費用ヲ償ハサルヘカラス然レモ裁判所ヨリ請求ノ改正ヲ許可シタルモハ必スシモ一切ノ訴訟入費ヲ拂フヲ要セサルモノトス

### 第八回

前回ニ於テハ訴答中法律ノ問題起ルモハ之カ攻撃ヲ受ケタル對手ハ

改正スルカ又ハ新タナル事實ヲ提出セサルヘカラサルヲ述ヘタリ  
 而シテ此手續ヲ正誤手續ト稱シ二様ノ別アリ一ハ當然正誤スルヲ得  
 ヘキモノ此ハ請願ニヨリ正誤セサルヘカラサルモノコレナリ  
 其當然正誤スルヲ得ヘキ場合ハ對手ヨリ答書ヲ出スノ前何時ニテモ  
 爲スヲ得又被告ヨリ反求スル場合ニハ原告ノ再答書ニ對シ答フルノ  
 前ナレハ何時ニテモ正誤スルヲ得可シ

若シ對手ヨリ答辯書ヲ出サ、ルキ又ハ反求ニ對シ原告答ヘサルキハ  
 對手ノ出頭届又ハ被告ノ反求届ヲ出シタルヨリ八日間ニ正誤スヘキ  
 ナリテ期限トス此場合ニハ裁判所ノ許シヲ要セサルヲ以テ請願スル  
 ノ手續ヲ要セス  
 其請願ノ手續ニヨリ裁判所ノ許ヲ得サルヘカラサル場合ハ訴答狀往  
 復ノ間ニ正誤ヲナサントスルキコレナリ此場合ニ於テハ許ヲ受ケタ

ルキハ何時ニテモナスヲ得而シテ其期限ハスヘテ裁判所ノ許ノ命令ニ從フモノトス  
若シ又原告一旦訴へ出タルモ尋常ノ正誤ノミニテハ之カ誤ヲ正スル能ハサルカ又ハ其儘ニテハ到底繼續スル能ハサルト認メタルキハ若シ既ニ再答書ヲ出シタルモ未タ對審ニ至ラサル間ハ訴訟中止ヲ届出ルノミニテ訴訟ヲ罷ムルヲ得然レモ若シ既ニ對審ノ後ニ至テハ裁判所ノ許ヲ要スルナリ  
又訴訟中ニ新タナル事柄起リ該事柄ノ訴訟上ニ必要ナルキ若クハ答辯ノ理由トナルヘキモノニシテ起訴ノ後ノ發見ニ係ルカ又ハ被告ノ反求ニ對シ答書ヲ出スニ就キ原告ニ於テ發見シタルキハ答書若クハ再答書ヲ出シタルヨリ八日間ニ新タナル事柄ヲ以テ答辯ヲ爲スヘキ許ヲ請願ニヨリ裁判所ヨリ得ラル、トアルヘシ

又若シ被告カ答辯ノ理由タルヘキ事柄ヲ以テ答辯シタルキ原告ハ之  
 チ承認スルノ受書ヲ提供シ是レマテノ費用ヲ被告ヘ償フヘシトノ言  
 渡ヲ受ケ裁判ヲ止ムルコトヲ得  
 加之既ニ裁判々決アリテ後新タナル事柄起リ以テ裁判ヲ打テ消スノ  
 力アルキハ該裁判ノ執行前裁判所ヘ請願シテ其執行ノ差止ヲ求ムル  
 チ得

上來説キタル所ニテ普通ノ訴答狀ノ手續ヲ概畧述ヘ了レリ然レモ茲  
 ニ尙ホ一種特別ノ場合アリ即チ「ぶろべー」と、あどみらる、ねんご、でば  
 す、でびじよんノ管轄スル所ノ海上衝突ノ爲メ損害要償ノ訴訟ノ手續  
 コレナリ  
 右ノ場合ニ於テハ訴答狀ヲ出ス前ニ先ツ海難報告書ナルモノヲ原被  
 兩造ヨリ裁判官ニ奉呈セサルヘカラス

海難報告書ナルモノハ衝突ノ時ノ天氣模様風ノ方位及其勢力ノ強弱、航行ノ進路、舷燈、船舶運轉ノ機關ノ有様等、其他船舶及ヒ航海ニ關スル一切ノ必要ナル事柄並ニ衝突ノ模様ヲ詳細ニ記載シタルモノトス。海難報告書ハ封書ニテ直チニ裁判官ニ奉呈スルモノニシテ之ヲ對手ニハ渡サ、ルナリ。

特別ニ如此手續ヲ要スル所以ノモノ海難事件ニ於テハ元來直接ノ證據ナルモノナクシテタ、原被両造ノ口供ノミニテ裁判セサルヘカラサル場合最モ多キモノナレハ豫メ先ツ原告被告ヲシテ充分ニ其信スル所ノ事實ヲ裁判官ニ告知セシムルニ在リ。

右ニ於テ余ハ訴答狀ニ關スル手續ノ概要ヲ述ヘ盡シタリ。

要スルニ上來ニ掲クル所ハ判決スヘキ訴訟ノ論點ヲ定メ事實ト證據トヲ區別シテ明細ニ之ヲ記載セシメン爲メ設ケタルニ外ナラス今マ

左ニ其規則ノ重要ナルモノヲ掲ケン

第一、訴答狀ハ原被兩造トモ據テ以テ爭ハン爲メ各其對手ニ對シ提出セントスル事實ヲ隱スコトナク之ヲ知ラシムルヲ以テ目的トナス可シ

第二、對手ノ拒絕セサル事實ハ其承認シタルモノト見做スヲ得

第三、對手ニ詐欺アリト答辨セントスルカ又ハ出訴期滿免除ヲ以

テ答ヘントスルキ又ハ對手ヨリ提出シタル事實ハ正當ナレトモ他

ニ尙ホ事實アリ之ヲ打消スニ足ルト云フヲ以テ答辨セントスル

キハ一々其主張セントスル事實ヲ擧ケテ答フ可シ

第四、訴答狀ニハ法律カ其對手ノ爲メニ認ムル所ノ事實ハ之ヲ掲

グクルニ及バス

又舉證ノ任ハ孰レニ在ルヤヲ記スルコ及ハス

第五、原被両造トモ各訴答狀中ニ記入スル事實ハ其以前ニ提出シタル書類ト齟齬ス可ラス

第六、原告ノ請求、被告ノ反求トモ之ヲ拒ムニハ理由ナク漠然ト之ヲ拒否スルヲ得ス必ラス之レカ理由ヲ擧ケテ拒否セサルヘカラス

第七、訴答狀中ニ他ノ書類ヲ記入スルヲ要スル場合ト雖モ其書類ノ文言ノ必要ナラサルキハタゞ文意ノ在ル所ヲ摘採シテ之ヲ記入スルヲ以テ足レリトス必ラスシモ文章全体ヲ記入スルニ及ハス而シテ據テ以テ爭ハントスル部分ノミ摘載スレハ可ナリ

第八、訴答狀中ニ對手ノ惡意若クハ詐欺ノ意思アルヲ擧クル爲メニ何故ニ惡意若クハ詐欺ノ意思アルト云フノ事情ヲ一々掲クルニ及ハス(注意此規則ハ訴答狀中ニハ證據ヲ記入スヘカラスト

云ヘル原則ノ一部ニシテ其證明ハ對審ニ當リテ之ヲ爲スヘキモノナレハナリ

第九、對手ニ已ノ主張スル所ヲ拒否セラレタルニ當リ之ニ答辨セシテ他ノ新タナル事實ヲ舉グルヲ得ス又對手ノ主張スル全體ヲ認メテ其一部ヲ拒否スルヲ得ス

第十、訴答狀ノ文言ハ何人ヨリ觀ルモ據テ以テ充分ニ爭點ヲ支持セラルヘキヲ明瞭ナル丈ノ事實ヲ簡明ニ記載スレハ足レリ

第十一、訴答ヲ爲スニ當リ原告ノ請求并ニ之ニ對スル答辨トモ二途ニ岐ルヘカラス但シ答辨ハ時トシテ二途ニ岐ル、トアルヘシト雖モ必ラスヤ結局ハ其一ニ歸セサルヘカラス若シ否ルキハ孰レカ一ハ誤リタルモノナルヘシ

訴答狀ニ關スル規則概畧右ニ掲クルカ如シ要之英國訴答ノ法、再答書

訴訟法/増島六一郎(講義) ; 石山弥平(編輯)

(英吉利法律講義録(1886(明治19)年度 第1年級))

137 ページ以降の講義録(37号以降)は非所蔵